# 志村美土里 メゾソプラノ リサイタル

## ～ふるさとに〝言の葉〟をこめておくる日本のうた～

### 花の街

江間章子 作詩／團伊玖磨 作曲

七色の谷を越えて 流れて行く 風のリボン
輪になって 輪になって かけて行ったよ
歌いながら かけて行ったよ

美しい海を見たよ あふれていた 花の街よ
輪になって 輪になって 踊っていたよ
春よ春よと 踊っていたよ

すみれ色してた窓で 泣いていたよ 街の角で
輪になって 輪になって 春の夕暮れ
一人さびしく 泣いていたよ

### さくら横ちょう

加藤周一 作詩／中田喜直 作曲

春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう
想出す　戀の昨日
君はもうこゝにいないと

あゝ　いつも　花の女王
ほゝえんだ夢のふるさと
春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう

會ひ見るの時はなからう
「その後どう」「しばらくねえ」と
言つたつてはぢまらないと
心得て花でも見よう
春の宵　さくらが咲くと
花ばかり　さくら横ちょう

### 春の鳥

北原白秋 作詩／團伊玖磨 作曲

鳴きそな鳴きそ春の鳥、
昇菊の紺と銀との肩ぎぬに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥、
歌澤の夏のあはれとなりぬべき
大川の金と青とのたそがれに。
鳴きそな鳴きそ春の鳥。

### さざんか

藪田義雄 作詩／猪本隆 作曲

さざんかの花ざかりだよ、
日おもてに咲きあふれて
あたたかな花むら。

わたしは見た、そのなかに
観音さまがお坐りになって、
うっすらとお目を開けてゐられるのを。
さざんかの蕾のやうに
ほころびかけた口許に、
光がすこしにじんで、
えもいはれぬ朝のひととき、

### 牡丹

北原白秋 作詩／橋本國彦 作曲

ほんにの、薄情な牡丹がちりかかる。
風もない日に、のう、
紅い牡丹が、のうもし、ちりかかる。
ひらきつくした二人がなかか、
雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

## からたちの花

北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

からたちのとげはいたいよ。
青い青い針のとげだよ。

からたちは畑の垣根よ。
いつもいつもとほる道だよ。

からたちも秋はみのるよ。
まろいまろい金のたまだよ。

からたちのそばで泣いたよ。
みんなみんなやさしかつたよ。

からたちの花が咲いたよ。
白い白い花が咲いたよ。

## 松の花

大木惇夫 作詩／磯部俶 作曲

松の木に花の咲くころ
松の木は悲しい、
黄色つぽい粉がほろほろ……

松の木によく登ったあのころ
松の木のてっぺんに
青い海の聲を聽かうとした、

あのころの、大人びた癖は今も悲しい、
砂地に脱いだあの靴は
よし、あつても、今は小さい……

松の木に花の咲くころ
松の木は悲しい、
黄色つぽい粉がほろほろ……

一ばん高い松の木に登れば
ひとしほ胸に沁みた松脂よ、
磯のにほひよ……

松の木に花の咲くころ
松の木は悲しい。

## くちなし

高野喜久雄 作詩／髙田三郎 作曲

荒れていた庭　片隅に
亡き父が植えたくちなし
年ごとに　かおり高く
花はふえ
今年は十九の実がついた

くちなしの木に
くちなしの花が咲き
実がついた
ただ　それだけのことなのに
ふるえる
ふるえるわたしのこころ

「ごらん　くちなしの実を　ごらん
熟しても　口を開かぬ　くちなしの実だ」
とある日の　父のことば
父の祈り

くちなしの実よ
くちなしの実のように
待ちこがれつつ
ひたすらに　こがれ生きよ
と父はいう
今も　どこかで父はいう

## ばら・きく・なずな －母に捧ぐ－

星野富弘 作詩／新実徳英 作曲

淡い花は
　母の色をしている
弱さと悲しみが
　混じり合った
温かな
　母の色をしている

母の手は
　菊の花に似ている
固く握りしめ　それでいてやわらかな
母の手は
　菊の花に似ている

神様が　たった一度だけ
この腕を動かして下さるとしたら
母の肩をたたかせてもらおう
風に揺れるぺんぺん草の
実を見ていたら
そんな日が
本当に来るような　気がした

## 電話

川路柳虹 作詩／山田耕筰 作曲

ちりりん、りん、
南の国から 電話です、——
黄ろいお蜜柑なりました、
椿の花もさきました、
ストーヴ消して、外に出て、
野原の草に坐りませう、

——もし、もし、そちらはどなたです、
——はい、はい、わたしは遠方の
東の風と申します、

わたしの可愛いゝ愛娘
鶯がもうぢきまゐります。
さよなら、さよなら、
ちりりん、りん。

## 叱られて

清水かつら 作詩／弘田龍太郎 作曲

叱られて、しかられて、
あの子は町までお使いに、
この子は坊やをねんねしな、
夕べさみしい村はずれ、
こんときつねがなきゃせぬか。

叱られて、しかられて、
口には出さねど眼に涙、
二人のお里はあの山を、
越えてあなたの花の村、
ほんに花見はいつのこと。

## 宵待草

竹久夢二 作詩／多忠亮 作曲

まてどくらせどこぬひとを
宵待草のやるせなさ

こよひは月もでぬさうな

## 曼珠沙華

北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲

GONSHAN. GONSHAN.　何處へゆく、
赤い、御墓の曼珠沙華、
曼珠沙華、
けふも手折りに來たわいな。
GONSHAN. GONSHAN.　何本か、
地には七本、血のやうに、
血のやうに、
ちやうど、あの兒の年の數。
GONSHAN. GONSHAN.　氣をつけな、
ひとつ摘んでも、日は眞晝、
日は眞晝、
ひとつあとからまたひらく。
GONSHAN. GONSHAN.　何故泣くろ。
何時まで取つても、曼珠沙華、
曼珠沙華、
恐や、赤しや、まだ七つ。

## 『寂しき夜の歌』より

大橋房子 作詩／山田耕筰 作曲

### 衣ずれの雨

笹におとなふ
衣ずれの雨に
病めるむね
ひしと抱きつ
夜もすがら
すゝり泣く

### をとめの心

いかにせん
かくと知れど
心とみにもだし
身をはなれゆく

いかにせん
かくと知れど
心とみにもだえ
君を去りゆく

いかにせん
あゝ、いかにせん
もえし心を
えもえぬこの身を
ああ、いかにせん
かくと知れど

## ゴンドラの唄

吉井勇 作詞／中山晋平 作曲

命短し、戀せよ、少女
赤き唇褪せぬ間に
熱き血汐の冷えぬ間に
明日の月日のないものを

いのち短し、戀せよ、少女
黒髪の色褪せぬまに
心のほのほ消えぬ間に
今日はふたたび来ぬものを

## 津軽のふるさと

米山正夫 作詞／作曲

りんごのふるさとは
北国の果て
うらうらと山肌に
抱かれて 夢を見た
あの頃の想い出 あゝ
今いずこに
りんごのふるさとは
北国の果て

りんごのふるさとは
雪国の果て
晴れた日は晴れた日は
船がゆく 日本海
海のいろは碧く あゝ
夢は遠く
りんごのふるさとは
雪国の果て
あゝ津軽の海よ山よ
いつの日もなつかし
津軽のふるさと

## 湖畔の宿

佐藤惣之助 作詞／服部良一 作曲

山の淋しい湖に
ひとり来たのも悲しい心
胸の痛みにたえかねて
昨日の夢と焚き捨てる
古い手紙のうすけむり

ランプ引きよせふるさとへ
書いて又消す湖畔の便り
旅の心のつれづれに
ひとり占うトランプの
青いクィーンの寂しさよ

## カチューシャの唄

島村抱月・相馬御風 作詞／中山晋平 作曲

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
せめて淡雪とけぬ間と
神に願いを ララ かけましょか

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
せめてまた逢うそれまでは
おなじ姿で ララ いてたもれ

カチューシャかわいや
わかれのつらさ
ひろい野原をとぼとぼと
ひとり出て行く ララ あすの旅

※楽曲によっては割愛した歌詞もございますが、こちらには本日演奏した歌詞のみ掲載しております

日本音楽著作権協会（出）許諾第2403058-401号